

にして、吾人の有する知識間の關係を付くることを主とするものなり、故に『ミル』の如く推論の結果が果して眞理に合ふや否やを問はば、是れ全く論理學の範圍を超脱したるものと云はざる可らず、又人類は不完全なるが故に、其の知る所のものも決えて絶對的にあらずして、却て假定的に概括 generalization をなすに過ぎず、若し果して然らんにば、『ミル』が『フ』氏を攻撃して、『歸納法は事實の合簇たるに過ぎず』と云ふは誤れりと云ふは、却て自己立脚地の誤謬を證明せるものと云はざる可らざるなり、』

社會と研究につきて

石橋愛太郎

前號に於ては社會の研究の必要をいひ哲學者に望み合せて凡ての人に示す所をいへり今や歩を進めて社會研究の一例を擧ぐ其説く所淺薄既に人の知る所なるべし又咄嗟の間試験前に接し調べを盡さず見るに堪へずされども容易なるとは決して容易に行はるるものにあらずして拙速にも亦幾分の味なからざる可らず故に殊に人の知る所を述べて反省を乞はんす余は先之にて此論を結び他日又開を得て論するの榮を得んとを望む

二、玉珠の辨を以て凡ての學業をなす人に望む

崑崗の璞研かば以て連城の壁となる可く、大海の眞珠光澤色美以て人目を驚かすに足る。今之を人に示して其一を取れと言はんに、人多くは後者を取り、前者の眞に璧たるや否やを疑ふ可し。然れども識者のよく之を選ぶ者は極目凝視泥底に美玉の閃光存するを見、璞を取りて珠を棄て嘗て外觀の美に迷はざる可きなり。是よく玉を知るものにして、他の珠を取る人の淺見にして目前の利に惑ひ、連城の壁たる可き實實を見る能はざるを笑はんなり。韓非子曰顧小利者大利之殘也、と果して珠を取る

ものは大利の残ならざるを知らんや。崑崗の璞は之を人にすれば塾實朴素些の美觀なきものゝ言にして、大海の珠は之を人にすれば小成飾志定見なるものゝ言なり。今之につきて論ずる所を見よ。

璞は切磋琢磨を経て後初めて閃光を發し、之を用ふる所宜しきを得て完璧となり、彼の車數乘を照すてふものとなる。古言に大人は幼時愚なるが如しと、老子曰

大方無隅、大器晚成、大音希聲、大象無形、

と虎兒猶猫に類する如きものか。然れども此の如き人の大人と成るや、鍛心練膽はよく風雪を凌ぎ嚴霜烈日に堪へ、竊かに体中に宿りし快刀の鍛練の功を終て、一振鞘を脱せんか、盤根を裁り錯節を斷じ、風霆迅雷耳を蔽ふに暇あらざらしむ。然れども其修練や極めて大にして、所謂擲身當事者にして死力を以て事を成すものなり。獅子兒を三月に亘て谿底に落す、よく其存するものや獸の王となるを得。彼のマホメットを見よ、身は孤兒より出で、商賈の宰となり、一旦山に入て頓悟せし後、世界廣しと雖唯一の信者なき亞刺比亞の廣原中に獨立して撓まず、進むで其教を立つ、宛も砂漠の中に豆一粒を播き、力めて其生長を望むが如く、到底出來可きにあらざるが如けれども、教權兩持の大英雄が有せる大勇は、その大仁大知を助けて、遂に幾多の困難幾多の瀕死をくぐりて、遂にモスレムなる宗教は西グレナダより東デルトに至る、世界の大宗教となりぬ。其修練の極大實に計る可らざるものあり。古往今來社會の兒として天下に立つもの多く大志あるもの少からず。然も其事を成さざるは、主として修練に堪るの志なく勇を缺くの至り、其世の行路難の大に驚きて逡巡進まず、玉となつて碎けず瓦となりて全きものとなり、空しく北邙一片の烟となり、墓石苔冷かに其名を世に残すものなきに至るなり、是豈男子の目的ならんや。吾しかく之をいふと雖、必ずしもマホメットの如き事業をなし、

しかく宗教政治を兩手に握れよといはず、只其勇を學むで事をとるに當り、知仁を用ひんことを望むなり。何となれば上述の如く當今は目前の事に奔りて大志なく、誠に意氣地なき鈍刀のみの世の中となり、毫も快刀に青龍の奔騰する底の心地よさを見さればなり。

翻て彼の珠を見よ、眞珠貝の殻を破て之を出せば、忽ちに其光澤色美よく人目を眩し直ちに裝飾の用をなす、然も甚だ重しとするに至らず。かくの如き人物は實に機械的に動くもの多くして、或る學を研究し或業を習ひ終て、學術機械の運用に當るものなれば、彼の璞を研ぐものゝ大なる手腕を要するも異なり、或時と或力を用ふれば可なり。かるが故に古來人才多しと雖、未だ驚天動地底の業をなすもの少なく、才子神童よくならず、猶却りて虎兇より恐る可き狀あるが如きなり、即一般人士は當世向の利口ものを貴び、よく目先のさゝ多藝にして人目を惹き易き小才子を喜び、后來成するの士を取らずして、泥底に隠れて現れず空しく恨を吞める玉あるを知らざるより、遂には眞の道誠の徳を省みずして、凡ての學を成し凡ての業をとるもの、皆已が仕事を專一とし道念日に消磨えて、珠の如き外觀の美をのみ力めて飾り、心は璞と共に掘り出さるゝことなく、眞の明光は世より埋れ去らんとす、是豈慨す可きの至りならずや。是何の故ぞや、今少しくその由來をいはん。

今や人力の世は早暮の太陽と共に沒えて、機械の世は朝の光と共に來れるあれば、人間萬事機械の如く動き、種々の機械は能く動きて成さるゝなく、便利至極の世の中とはなれり。されども事物に一利害あるは數の免れざる所にして、此機械も亦利と共に大なる害を與へぬ。即人は此機械に追はれ、金の運轉は瀛關の車より速かに、人心の道光現れんとして出る能はず、昔は義理といひ、人情といひ、目に一丁字なき匹夫も之をはづれざらんとして、人の道は正しく行れしに、今は一生を機械の如く過

して、機械が油炭を要する如く、人は衣食を要するとなま、人か虫か將た機械か毫も區別する能はざるに至れり。社會の大勢然るが故に、此世にあるもの其志す所その行ふ所、一直線に軌道にはづれず利慾の滾車を走らするなり。故に耳に聖賢の教をさへ、口に道德の談を語るも、必竟五月の鯉の如く吹き抜きて止まる所なく、人心の道光に觸るゝことなし。即カアライルがいへる

Benthamite utility, virtue by Profit and Loss; reducing this God's-world to a dead brute Steam-engine; the infinitive celestial Soul of Man to a kind of Hay-balance for weighing hay and thistles on, pleasures and pains on.

のベンザムの實利主義實行の世となりて、學に志し業を勵むものも、人生の何たるを知らず人間の如何なるかを知らず、操行修まらざるも意とせず、只人目に裝ふて心中の泥芥は學識佞辯を以て覆ひ、其外面極めて美に専ら禮を重んじ、外交に巧みに虚儀を以て交際をなせり。然るに老子呵して曰く夫禮者、忠信之薄、而亂之首也、前識者、道之華、而愚之始也、是此大丈夫處其厚、不取其薄、居其實、不居其華、故去彼取此、

誠に之なり又カアライルは當今の人が誠に奇麗なれどもその實恐る可き正直ならざるものを言れり曰く

He is the insincere man: smooth-polished, respectable in some times and places; inoffensive, says nothing harsh to any body; most *cleanly*, - just as *carbonic acid* is, which is death and poison.

かくの如くなるもの即當今の人士が殊たる所以なり、而も其根底を探ぐれば、一にベンザムニズム即

實利主義を奉じて、利己の主義を極端に行はんとするものなり。必竟已れのみを愛して他を愛せざるに歸するなり。博愛衆に及ばずとは人の知る所なり、されども人の動もすれば之を忘れんとす。凡て人は學んでよく萬事を知る、殊に況んや當世向の利口者に於てをや。よく萬事之を知るも徒に口にのみして、耳口の間僅に三寸なるのみ。老子曰

吾言甚易知、甚易行、天下莫能知、莫能行、言有宗、事有君、夫性無知、是此不我知、知我者希、則我貴矣、是此聖人被禍懷王、

然り凡て容易に知りて、容易に行ふ可きものを知り且行へば、天下何の難きことか之有らん。而して却て容易なることを行はずして、道ならぬことを行んとすればこそ甚難きなれ。高名の木登りは最低き處にて飛び下ることをなさず。今の人は皆愚にして聖人の教を行はず、却て容易の事なりとて省みず、聖人被禍懷王の歎を發せしむるなり、故に今や余をして萬事容易なりと思ふ事より難きはなしとの理を認めしむるに至りぬ。

故に今人の知り且行ふに易く、然も人の凡てなさざる處のものを少く擧げて玉珠の辨に添て、學者の反省を促さんとす。

再び上述を概括すれば、當今の社會は珠の如き人の巢窟となり、些の趣味ある人間を見ざるに至り、遠大なる志、深廣なる行を志すものなく、徒らに乾燥無味にして、砂を噛む思ひあらしむるもののみにして、金か人か、人か機械かを疑はしむるに至れりといへるなり。カアライル曰く

The best science, is but as the dead timber; it is not the growing tree and forest. His knowledge is a pedantry, and dead thistle.

是必覺心を道念に用ふることもなく、信仰の念想なきが故なり。即換言すれば道念及信仰の念想なきが故に、萬物の表面のみにて實相を見ることもなく、遂に機械の如くなるなり。カアライル又教て曰く

Without morality, intellect were impossible. To know a thing, a man must first love the thing, sympathise with it,

Man cannot know either, unless he can worship in some way.

然も是必覺只已れを愛することを知りて、他を愛することを知らず、即道德心宗教心なきが故なり失名氏曰く

There is no vice or crime that does not originate in self-love; and there is no virtue that does not grow from the love of others out of and beyond self.

即仁を本として道心の第一をつくる可きなり。老子は曰く

失道而后德、失德而后仁、失仁而后義、失義而后禮

是人間根本の道にあるをいふ、此間の消息は深く人たるものゝ研究す可きなり。是余が學者に望む所なり、此事人は知る可し又或は容易なりと思へるならん、而も甚困難なり、即璞となる可き人物は、珠とならずまで深く根底の愛を養ひ、之によつて大知を得、之を助くるに大勇を以てす可し即璞の條に於ていひしマホメットの流を酌めよ。此注文にして全く果すものあらば、是天下の快男子にまで、カアライルがマホメット論の最後に記す所の如くなる可し。今又その終末の言を以て此論を終らん。

The Great Man was always as lightning out of Heaven; the rest of men waited for him like fuel, and then they too would flame.